

研究目標とし、約5年間でできる様に計画した。

<記 録>

○37年8月 秋山・添野が又白池に入り、本格的な準備、登攀の偵察を行い、まる2日間かけて、茶臼の頭でプリズムをのぞきながらルートファンディングを行う。翌日から登攀を行う予定であったが、思わぬ事故に合い、よぎなく下山した。

○38年8月 部員合宿を下又白の研究に当て、秋山リーダー以下10名が入山、登攀を始めたが、天気が悪く、又大きな落石もあり、計画を変更して、ベースを徳沢にうつして、下部の岩壁帯の偵察を行う。しかし最初の滝は約60メートル程あり、約20メートルをハーケン・ボルトをたよりに登ったが、ウッドペグの必要にせまられ、泣き泣き下山した。同年9月 添野以下4名で、下部岩壁帯に入山、ウッドペグを持参したが、悪天候の為1週間ほどねばったが登れなかった。

○39年8月 松坂以下4名が、又白池にベースを作り、上部（下又白奥壁）を約80メートル、中央部にある人面岩まで登り（茶臼から見ると、人間の顔の形をしている。）、落石の為下山、徳沢にベースをうつし、下部の滝をねらったが、雪が多くシュルンドが大きく、壁に取り付けずやむなく下山した。

○40年8月 夏の部員合宿を下又白登攀に当て、添野リーダー以下7名が参加。上部奥壁を初登攀。下部の第1の滝を登攀し、ブッシュつたいの藪尾根（山巡稜と新名称）に登り、ヒョウタン池に抜ける。

以上がこの4年間の山行であるが、その成果として、第1に奥壁の初登攀、第2に今まで人間が見る事が出来なかった下又白谷の全貌が明らかとなり、（まだ不明の部分も若干あるが）特に、茶臼菱形大岩壁・菱形右方ルンゼの発見もあり、第1次研究としては、非常に成功したと思う。

今後続いて下又白の研究を行うのであるが、特に下部滝群については、その登攀の可能性の問題、茶臼の岩壁帯の研究もあり、非常に興味のある谷で、今後3年ないしは5年位の年月が必要であると思われる。

「下又白谷奥壁」

壁の長さ400メートル、巾400メートル、傾斜約80度（部分的に大小のハングあり）、下降に都合の良いルンゼが右方に有り壁の上部の平な所（野球場と呼んでいる）に抜けられる。左の部分は白くボロボロで、ここは登攀不可能。中央部も落石が多く、畳1枚位の岩がはげる事もある。

「下又白谷下部」

全体で高度差約400メートルで、だいたい4つの滝群からなり、下から、第1の滝は約60メートル、傾斜80度、滝から左に高さ100メートル、巾100メートルの壁があり、我々はその中央部を登攀した。第2の滝は高さ80メートル、傾斜約80度、兩岸のスラブは高さ約100メートルで、オーバーハングの1枚岩からなり、登攀不可能の様に思われる。第3の滝群は、約30メートル位の滝が垂直に2つ重っており、どの滝も登る事はなかなかむづかしいと思う。第4の滝は約100メートルの傾斜の比較的なだらかな滝があって、これは登攀可能と思われる。又滝群と滝群との間は雪渓があって、この登りも困難ではないかと思われる。

「茶臼菱形岩壁」

これは一大発見でこの様な大岩壁は日本中どこにもないかと思われる様なみごとさで、谷川岳の